

The History of Gutta-Percha Willie における

挿絵の一考察

—天使の挿絵に着目して—

高橋摩利子

はじめに

ジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) の *The History of Gutta-Percha Willie* (1873) は、子ども向けの定期刊行物 *Good Words for the Young* (1868-1872) の中で 1871 年に連載され、1873 年に本として出版された児童文学作品である。物語は、主人公の天才と呼ばれている少年ウィリーが、彼自身が身につけた技術を用いて人々のために役立つことを考え試行錯誤しながら成し遂げ、またウィリー自身も成長していく物語である。

本作品には、挿絵画家のアーサー・ヒューズ (Arthur Hughes, 1831-1915) が描いた 9 枚の挿絵が添えられており、それらは物語に非常に忠実に描かれている。その中でも、1 枚だけ他の挿絵とは異なり、ウィリーの夢に現われた 2 人の天使の挿絵が描かれたものがある。この天使はウィリーの父親と聖職者のシェパード氏であり、2 人は死後に天使の姿として肖像画が残されたのであった。また、この挿絵には多くの象徴的要素が含まれており、ウィリーの未来に大きな影響を与えていると思われる。

先行研究において、マクドナルドとヒューズの作品と挿絵の融合性については、すでに述べているもの¹⁾があるが、本作品の挿絵に関しては具体的な例は示されていない。

本稿の目的は、物語におけるヒューズの 9 枚の挿絵に焦点をあて、特に 2 人の天使の挿絵を中心に検討および考察することである。ウィリーは、父親とシェパード氏を尊敬しているのは確かであり、だからこそこの 2 人が未来を予知し、

ウィリーに伝達するために天使の姿として描かれているのではないだろうか。

本稿では、まず初めに当時の木口木版画の技術について確認し、次に本作品に添えられている挿絵を見ていきたい。最後に特に注目したい天使の挿絵について検討し、ウィリーの父親とシェパード氏の願いが天使として投影されていることを証明したい。この考察によって、物語に挿絵を添えることは、視覚的解釈を効果的に取り込むだけでなく、さらに踏み込んだテキストの解釈を導くこともありうることを証明する。

雑誌名 *Good Words for the Young* と小説名 *The History of Gutta-Percha Willie* は英語表記のままとする。

1. 19 世紀の木口木版画の技術

本章では、本作品の挿絵にも採用されている木口木版画 (wood engraving) の歴史と技術について確認していきたい。挿絵画家の存在も大きいですが、非常に優れた技術を有し熟練した彫り師の存在によって、挿絵の細部の表現が丁寧に再現されているのが木口木版の特徴である。

木口木版画の歴史は、「ヨーロッパの木版画の伝統を母体として生まれ」、1600 年以降、木版画は書物の挿絵にはほとんど用いられてなかったが、「ヴィニエット (vignettes)」や「末装飾図案」(『西洋版画の歴史と技法』24) などには時折用いられていた。木口木版は、18 世紀末の英国でトマス・ビューイック (Thomas Bewick, 1753-1828) によって革新された印刷技法であった(『世界版画史』140)。広く普及したのは 1830 年以降であり、「一般大衆への教育普及振興と、蒸気による動力印刷機という技術革新の導入によって、ジャーナリズムおよび出版業が飛躍的に拡大した」(『西洋版画の歴史と技法』25) のであった。木口木版の特徴は、「何万という部数で印刷される書籍に対して、豊かな細部表現と安価な制作コストを両立できる」(同上) ことである。ヨーロッパやアメリカでは、挿絵画家たちの素描などを忠実に版木に再現することのできる彫り師たちの技術の影響も大きかった。特に、「ダルジール・ブラザーズ工房」

(The Dalziel Brothers) は有名であり、非常に質の高い技術を有した木版彫刻家 (wood-engraver) たちが活躍した。*Good Words for the Young* の白黒の木版画は、ダルジール・プラザーズ工房によって制作されたものであり、本小説の *The History of Gutta-Percha Willie* の挿絵にも “DALZIEL” のサインが入っている。

19 世紀を通じて増加していった木口木版画の挿絵入り書籍であるが、「1880 年代なかばに写真製版による凸版印刷技術が出現すると、その後 10 年も経たないうちにすべての版画工房は消滅してしまった」(同上) という。1850 年前後が本技術においては最盛期であったのである。

木口木版画の技法は、「版木には、非常に堅い木材、通常はツゲ材が用いられている」(同上、22)。普通の彫刻刀とは異なりグレイヴァー (graver) と呼ばれる道具を使う。この道具の刃については、「断面が正方形あるいは菱形の小さな鋼鉄の棒の先端を、斜めに尖らせた」(同上、22-3) のものであり、「握りの部分を手のひらにあて、刃の先端近くを親指で支えて方向を定めながら、前方に押し出して掘っていく」(同上、23) ののである。先に述べた非常に美しい繊細な線描を再現することができる彫り師の存在も重要であった。木口面の木目の細かさによって、「非常に繊細な線描を刻む」ことができ、「通常の木版の彫り師よりも、木口木版の彫り師の方が細部表現に優れた作品を生み出すことが可能」(同上) なのである。一ミリ幅に数本の線が引けるほどである。この熟練された木口木版の彫り師たちは、「水彩画の淡彩部分に似た視覚的効果をもつような、繊細な線による網目を彫り出すことができた」(同上) という。この技術によって、挿絵画家が描いた線描だけでなく明暗のコントラストを備えた絵についても、下絵に忠実に再現することが可能となったのである。刷りの方法は木版画と同じである。「スクレイパー (削りへら) を用いて版画の一部を浅く削ることで印刷圧を下げ、真っ黒ではなくグレーに刷ること」(同上) も可能であり、白黒の濃淡だけでなくグレーも取り入れることで、より視覚的効果をもたらすことが可能である。

上記に述べたように、19 世紀は木口木版画が充実していた時代であり、作

家と挿絵画家の関係だけでなく、挿絵画家と彫り師の関係も重要であった。彫り師の技術によって、絵はより忠実に再現することができ、非常に質の高い挿絵が作られたのであった。

2. 本作品における挿絵

本章では、物語に添えられている9枚の挿絵について見ていきたい。風景よりも主に人物に焦点を当てているのは明らかである。しかし最後の1枚は天使が描かれており、この挿絵については次の章で検討していくものとする。

各挿絵の場面については以下を参照されたい。

【表】

挿絵	場面
【挿絵1】	<p>ウィリーがウィルソン夫人の家で彼女が話す物語を熱心に聞いている場面</p> <p>ウィルソン夫人はキャップをかぶっておりエプロンをしている。</p> <p>ウィリーの服装はジャケットとズボンである。</p> <p>彼女は暖炉の前で話をしており、壁に光が差し込んでいるように見え、部屋全体が暖かい雰囲気である。ウィルソン夫人の隣には猫が座っており、この部屋が居心地良く暖かいということが挿絵からも伝わる。また、まるで猫も夫人の話に耳を傾けているようにも見える。ウィルソン夫人の視線はウィリーの目をしっかりと見ながら話しをしている。</p> <p>暖炉の上と左横の部分を白くぼかすことによって中心がウィルソン夫人とウィリーに移動する。</p> <p>ウィルソン夫人は、貧しい人々が住んでいる家に住んでおり、未亡人で身寄りがいない。また、40年前にはウィリーと同じ年ぐらいの息子を亡くしており、彼を自身の息子に重ね合わせているのかもしれない。彼女はウィリーが来るのをとても楽しみにしており、またウィリーも彼女の話に非常に興味を持っている。</p>

	<p>【挿絵 1】 の場面</p> <p>In that chair, then, the little boy would sit coiled up as nearly into a ball as might be, like a young bird or a rabbit in its nest, staring at the wheel, and listening with two ears and one heart to its song and the old woman's tale both at once (Chapter 2, 108).</p>
【挿絵 2】	<p>母親が眠れるように、ウィリーは妹のアグネスにミルクを飲ませながらあやしている場面</p> <p>ウィリーは座って膝の上に赤ちゃんのアグネスを乗せてミルクを飲ませている。彼女は泣き止んでいるが、母親の表情は心配そうである。ウィリーは妹を落とさないようにしっかりと抱きかかえている。</p> <p>遠近を出すために白黒のコントラストをうまく利用し、背景の黒は夜の暗い部屋を演出し、ウィリーの服とベッドのカーテンに影を入れることでウィリーとアグネスの方に視線が移動する。</p> <p>【挿絵 2】 の場面</p> <p>So Willie walked about the room with Agnes till his mother had got her bottle filled with nice warm milk-and-water and just a little sugar. When she gave it to him, he sat down with the baby on his knees, and, to his great delight, and the satisfaction of his mother as well, she stopped crying, and began to drink the milk-and-water (Chapter 4, 146).</p>
【挿絵 3】	<p>ウィリーが農場主トムソンさんの従業員と水車を見ている場面</p> <p>木々の間から見える大きな水車である。ウィリーは非常に興味深く見ている様子である。この後、彼は水車を作ることを決めたのであった。</p> <p>大きな木々や細かい草の描写である。水車はあまり整備されていない自然の場所に設置されている。</p> <p>【挿絵 3】 の場面</p> <p>When Willie was a tiny boy, he had gone once with Farmer Thomson's man and a load of corn to see the mill; and the miller had taken him all over it. He saw the corn go in by the hopper into the trough which was the real hopper, ...But the best of it all was the wheel outside, and the busy rush of the water that made it go. So Willie would now make a water-wheel (Chapter 7, 227).</p>
【挿絵 4】	<p>月明かりの中、廃墟の隣の芝生のところでウィリーが父親に自身が見た夢や試みたことについて話している場面</p>

	<p>父親は仕事帰りでコートとマントを着用したまま、右手には帽子を持っている。ウィリーは寝巻着姿で、急いで父親のところへ駆け出していった様子である。挿絵の右下には、ウィリーが考案した目覚し時計用の歯車が描かれている。</p> <p>白、黒、ぼかしたグレーの色合いを使っており、夜や月明かりの描写などがうまく表現されている。</p> <p>彼が父親に話したい内容の一部</p> <p>He often dreamed that he had waked up, and was looking out on some gorgeous and lovely show, but in the morning he knew sorrowfully that he had only dreamed his own dream, not gazed into that of the sleeping day. Again and again he had worked his brains to weariness, trying and trying to invent some machine that should wake him (Chapter 12, 282).</p>
【挿絵 5】	<p>ウィリーと父親が祖母を迎えに行った場面</p> <p>本挿絵は他の版には含まれていない。</p> <p>馬車が到着したとき、ウィリーは馬車のドアを開けた。祖母が降りるとき、彼女の表情は非常に不安そうにウィリーを見つめているように見える。ウィリーの父親に支えられながら降りようとしている。また馬車の中から母親の姿も見える。</p> <p>背景、馬、御者を白くぼかすことで視覚が祖母と父親に移動している。</p> <p>ウィリーが見た祖母の印象</p> <p>The first thing he caught sight of was a curious bonnet, like a black coal-scuttle upside down, inside which, when it turned its front towards him, he saw a close-fitting widow's cap, and inside that a kind old face, and if he could have looked still further, he would have seen a kind young soul inside the kind old face. She smiled sweetly when she saw him, but was too tired to take any further notice of him until she had had tea (Chapter 14, 323).</p>
【挿絵 6】	<p>家政婦のティビーがガッカリした様子で外にいるところをウィリーが窓から見ている場面</p> <p>ティビーはキャップをかぶっており、水差しを持ちながら大きな水たまりを見て、ウィリーの仕業だと呆れた様子である。</p> <p>ウィリーは井戸から水が湧き出ることができれば、ティビーが毎日遠くまで水を汲みに行く必要がなく、大変な労力から解放されると光景を目に浮かべていたが、ティビーの感情はウィリーとは反対だった。</p>

	<p>【挿絵 6】 の場面</p> <p>He needed no reply when he saw a great pool of water about the back door, fed by a small stream from the direction of the woodhouse. Tibbie had come out, and was looking on in dismay... The whole place'll be bog before long, and "we'll be all turned into frogs, and have nothing to do but croak. That well'll be the ruin of us all with cold and coughs" (Chapter 15, 361).</p>
【挿絵 7】	<p>蹄鉄鍛冶場でウィリーがいて妹のアグネスが馬に乗っている場面</p> <p>本挿絵が含まれていない版または表紙になっている版がある。</p> <p>白い馬が非常に際立っている。馬の表情はウィリーに懐いているように見え、ウィリーと馬の関係も良好であるように見える。妹は少し不安そうに見える。</p> <p>ウィリーはカレッジに通っており、夏の期間にはいつもプライオリー・リーズ (Priory Leas) に帰省していた。アグネスはウィリーがいることを非常に喜んでいたのである。</p> <p>アグネスの喜びが表れている場面</p> <p>He always came home to Priory Leas for the summer intervals, when you may be sure there was great rejoicing-loudest on the part of Agnes, who was then his constant companion, as much so, at least, as she was allowed (Chapter 20, 422).</p>
【挿絵 8】	<p>ウィリーが妹のアグネスを抱きかかえて階段を上がってニレの木の大きな枝の真ん中のところまで行った場面</p> <p>木々の描写が非常に繊細で動きが感じられる。アグネスは眠った様子である。</p> <p>アグネスが「鳥になりたい」という希望に少しでも近づけるように木の上に行くことをウィリーは考えたのである。彼女はいつも夜7時に寝るため、10時頃にウィリーは寝ている彼女を母親のショールで包み庭に連れ出したのであった。</p> <p>【挿絵 8】 の場面</p> <p>...Willie, taking a soft shawl of his mother's, went into Agnes's room, and having wrapped her in the shawl, with a corner of it over her head and face, carried her out into the garden, down to the trees, and up the stair into the midst of the great boughs and branches of the elm tree (Chapter 21, 460).</p>

	<p>...Willie did not answer her, and the little head sunk on his shoulder again. He drew the corner of the shawl over it, and carried her back to her bed. When he had laid her down, she opened her eyes wide, stared him in the face for a moment, as if she knew all about everything except just what she was looking at, put her thumb in her mouth, and was fast asleep (Chapter 21, 460-461).</p>
【挿絵 9】	<p>ウィリーの夢：2人の天使がいる場面</p> <p>ウィリーの父親と聖職者のシェパード氏が天使として描かれている。詳しい描写は、次章で述べるものとする。</p> <p>【挿絵 9】の場面</p> <p>And what was most wonderful of all—by the fire stood two angels, with grand lovely wings, and they made a great fanning with their wings, and so blew the fire up loud and strong about the golden cauldron. And when Willie looked into their faces, he saw that one of them was his father, and the other Mr. Shepherd. And he gave a great cry of delight, and woke weeping (Chapter 22, 465).</p>

9枚の挿絵を参照すると、ウィリーの家族（ウィリー、父親、母親、妹のアグネス、祖母）と一緒に住んでいる家政婦のティビー、またウィルソン夫人などが描かれており、【挿絵 9】のみが天使という姿でウィリーの父親とシェパード氏が描かれている。

ヒューズは繊細な線を巧みに使い分けて光と影を対比させている。そのことによって時間や空間の情景を視覚化できる。また、草木や自然物の描写についても動きが感じられる。『イギリス挿絵史』で指摘されているように、「原画家と彫版画家との間には、原画と彫版について深い相互理解が成立していなければならない」のである（『イギリス挿絵史』16）。作家と挿絵画家の関係も作品を作り上げる上で重要であるが、挿絵画家と彫り師との関係にも注視したい。素描に対し白黒の濃淡や繊細な線なども彫り師により見事に効果的に再現されている。この木口木版画は明らかに、質の高い挿絵とともに読者に非常に力強い印象を与えている。

3. 2人の天使の挿絵

前章では、本作品における挿絵について見てきたが、【挿絵9】については、ウィリーが見た夢に登場した2人の天使が描かれている。この天使は先に述べたように、ウィリーの父親と聖職者のシェパード氏である。2人は常に世の中の人のために役立つことを考えており、ウィリーの夢の中で現われた2人の天使は、人々を救済する神の使者として、またウィリーが現在すべきこと、それを実行することによる未来を暗示し、天使という姿でウィリーの夢の中で視覚化されていると考えられる。本章では、この点に着目し検討していきたい。

ウィリーが見た夢は、真夜中に目覚まし時計にしている歯車のひもに引っ張られて目を覚まし庭に降りようとしたところから始まる。何か起きているのではないかと思い見に行ってみると、体調の優れないヘクターの寝室に小川の水が流れており、また患者たちが寝ているいくつもの部屋にも小川の水が流れ、それらの部屋すべてを走り抜けるとついに井戸があるように見えるアーチ型の部屋にたどり着いたのではないかと彼は推測した。その部屋にも勢いよく水が流れていたが、そこに2人の天使がいたのである(Chapter 22, 465)。水には「生命を与える液体のすべてを表し…眠れる者を目覚めさせ、回復させる水」(『イメージ・シンボル事典』678)の意味もあるため、再生や復活、救済が暗示されている。

【挿絵9】を参照すると、2人の天使のうち左右どちらがウィリーの父親であるかは不明である。天使の特徴は以下の通りである。左側の天使：両手を広げているように見える。左手の方が上側に伸びている。顔の表情は明確ではないが下を向いており、ウィリーの方を向いているようにも見えるため、この天使が父親かもしれない。服装は長袖の白衣に覆われている。真の姿は隠されている。真の姿が隠れているのは「人間にとってはまだ近寄り難い天上の秘密の表現でもある」(『天使 浮揚と飛行の共同幻想』150)という。右側の天使：顔は上向きで身体は翼や炎でほとんど隠れている。左側の天使と同様に真の姿は隠されている。2人とも鳥の羽のような翼が2つ背中に付いており、双方の翼は、

片方は上向きでもう片方は下向きで広がっていない。この2人の下向きの広がっていない翼が2つ並んでおりハートの形にも見える。また炎に包まれている空間の中で天使は並んで立っている。ウィリーは彼らの方を向きしゃがんでいる。彼は寝巻き姿である。

一般的に天使は、「特に天の霊的存在における9つの「階級」の最下位」（『キリスト教美術シンボル事典』14）であり、「神の恩寵や神託を運ぶもの（告げる）」（『イメージ・シンボル事典』17）と説明されている。さらに、『天使とはなにか』を参照すると、「厳密な意味での天使、つまり、神の命令を伝え、幻を見せ、技術を教えたり、集団を導くといったメッセンジャーとして現われるものもある。また、人間を見張ったり、助ける任務ももっている」（『天使とはなにか』18）。まだ生きている2人が天使として夢に登場したということは、ウィリーに今伝えたいこと、そして彼がすべきこと、実行することによる未来の暗示を神からの神託として告げ、本質的な帰結を導くためであったと捉えることができないだろうか。

腕の動きにも注目したい。左側の天使は腕を広げているように見えるが、左腕を前に差し伸ばしているようにも見え、これは「神の命令を伝え、上に挙げた手は神への祈りを示している」（『キリスト教美術図典』351）ためであると考えられ、病気の人々を救うことに注力することができる2人の力をウィリーに受け継がせたいと願っていると考えられる。

ハート型に見える翼は、新約聖書では、「救済された人々の「心」に神の言葉を聴く力、神の愛が注がれる（ロマ5-10, ガラ4:6）」（同上、346）ものであり、2人の片方ずつ閉じた翼が合わさり1つの形を成していることから、この2人が1つになることによって神からの非常に大きな愛の力を表している。また、ハートは心臓の形でもあり、「よい忠告の宿るところ、忠告者の心」（『シンボル辞典』321）であることから、2人の願いが込められている。

天使は炎に包まれているように見えるが、炎には「生命力」や「浄化」（『イメージ・シンボル事典』250）の意味があり、本挿絵における炎の描写は、2人の希望の生命力が、小さな灯火ではなく大きく強く燃え上がっている様子か

ら現実世界で生きている2人の魂が活動的に動いており、さらに炎に守られているという解釈が可能である。

ウィリーの前に現れた天使たちは、以下に述べているように、ウィリーの未来へ向かう案内人としても捉えることができる。夢の中では天使は言葉を発してはいないが、ウィリーに指し示したかったことを教えている。

天使たちは外側に向けられた人間の知覚に入り込んでくる。いわば人間とその生活空間の間に押し入ってくる。そしてその思考を自分の方へ向けさせ、それによって彼らの知らせをすぐに解釈するように要求する。その知らせは、人生の道を確認させることもあるが、しばしばまた採られた方向を変えさせもする。(『天使 浮揚と飛行の共同幻想』91)

ヒューズの描いた天使は、非常に美的で神秘的な姿として表現されている。この2人の天使が男性として描かれることで彼らの役割が明確になるのではないだろうか。キリスト教美術では、「天使の姿を青年らしく描いているのは、旧約および新約聖書の出典に関係」があり、天使の使者としての任務が男性的な活動と見られているのである」(同上、140-141)と説明している。ウィリーへ伝えるべきことがあるため、ここでの天使には使者としての任務が強く表されている。

また、天使の姿の2人をウィリーが受け入れたことは現実社会での2人の行動と結びついている。ウィリーは医師である父親を常に尊敬しており、ウィリー自身も世の中の人々の役に立つようになりたいと幼い頃から思っていたのであった。以下はウィリーが父親を非常に優れた人物と思っていること、またウィリーが世の中の役にたつようになりたいと思っていることが読み取れる一場面である。

He [Willie] learned, too, that there was a great deal of suffering in the world, and that his father's business was to try to make it less, and

help people who were ill to grow well again, and be able to do their work; and this made him see what a useful man his father was, and wish to be also of some good in the world. (Chapter 2, 108)

後にウィリーは父親と同じ医師になりたいと思い始めるが、それは彼自身ができる最善のことという理由からであった。もう1人の天使として描かれているシェパード氏であるが、彼は常に人々に寄り添った考えを持っている。ウィリーと同年の娘のモナがおり、後にモナはウィリーと結婚するので、ウィリーにとって彼は義理の父親にあたる。

物語の中で、シェパード氏がウィリーに父親とシェパード氏の仕事の違いは何かと尋ねる場面がある。ウィリーの考えを聞いた後、シェパード氏は以下のように述べる。

“If you were to take a few strong words, a few persuasive words, and a few tender words, mightn’t you mix them so--that is, so set them in order--as to make them a good medicine for a sore heart, for instance?” (Chapter 19, 420)

強い言葉、説得力のある言葉、優しい言葉を混ぜ合わせて用いることによって、言葉を薬として病気を癒すために使えるのでは？と問いかけている。以下はシェパード氏が神からの薬を備えていると述べている場面である。

“But He [God] uses medicines; and He sends people about with them, just like the doctors’ boys you were speaking of. What else am I here for? I’ve been carrying His medicines about for a good many years now.” (Chapter 19, 421)

シェパード氏が述べているように、彼の場合は言葉が人々に癒やし、治療や救

済を行っているのである。また言葉は神から伝達されたものであり、神からの薬として言葉を用い、病気の人々の救いを試みているのである。

さらに、彼はウィリーの父親については言葉の薬と飲む薬の両方を備えていると以下のように述べている。

“But,” Mr Shepherd went on, “your father carries about both sorts of medicines in his basket. He is such a healthy man that I believe he very seldom uses any of his own medicines; but he is always taking some of the other sort, and that’s what makes him fit to carry them about. He does far more good among the sick than I can. Many who don't like my medicine, will yet take a little of it when your father mixes it with his, as he has a wonderful art in doing. I hope, when your turn comes, you will be able to help the very man himself, as your father does.” (Chapter 19, 421)

ウィリーの父親は言葉と薬の両方の治療法を有しており、これについても神から授かったものであるということが、以下のシェパード氏の説明から読み取れる。

“No. It is a very wrong thing to take up that basket without being told by Him who makes the medicine. If He wants a man to do so, He will let him know--He will call him and tell him to do it. But everybody ought to take the medicine, for everybody needs it;.... (Chapter 19, 421)

上記で述べたように、シェパード氏は言葉の薬を、ウィリーの父親は言葉と薬の双方を備えており、2人とも神から授かったものを自身の役割と承知しているように解釈できる。それらは病気で苦しんでいる人々の救済へと結びつけら

れる。従って、この2人から非常に大きな力が放たれているのが、天使の挿絵からも視覚的に見て取れるのではないだろうか。イエス・キリストが世の中で行ってきたことをウィリーの父親とシェパード氏は受け継いでいる。この2人が神の使者として天使に姿を変えたと解釈することが可能である。現実社会で彼らが行っている活動と使者としての天使の役割を重ね合わせることができる。

シェパード氏は、「その中で最も偉大な人間とは、他の人々を助けるために自分自身を最大限に捧げた人です」(Chapter 19, 420)と、イエス自身が行っていたことを述べ、ウィリーもまた医師として同じような行いをした場合には、ウィリーもイエス自身の行動と重なる行為をすることができるということを示唆している。

...namely, that the greatest man in it is he who gives himself the most to help other people. It was because Jesus Himself did so--giving Himself up utterly--that God has so highly exalted Him and given Him a name above every name. And, indeed, if you are a good doctor, you will be doing something of what Jesus did when He was in the world.”
(Chapter 19, 420)

ウィリーが2人の天使の夢から覚めた後、人々のために役に立ちたいという意識は、その夢のおかげで高まったのである。彼はこの夢の内容を現実にしたいと思い、実際不可能なことでも何かできないだろうかと考えていた。彼は以前から、自分の理想を実現できない運命にある人々は、それに向かって最初の一歩を踏み出せない人々であることを知っていたのであった。『キリスト教概説』を参照すると「預言とは未来の出来事を先見する事であるよりも、むしろ現在の動きを正しく解釈する事だと解さるべき」(『キリスト教概説』30)だとされている。未来に繋げるためにも今できることを考え、ウィリーは廃墟の修道院の壮大な建物の復元を計画し始め、復元後には、きれいな空気と修道院の井戸からの水が病気の人々にとっては非常に効果的であると知られるようになった。

また、修道院の廃墟に台所と部屋を建築する時には、父親だけでなくシェパード氏も協力も得ていた。後に、利益も得るようになり、きれいな空気、水、父親の医療によって、人々は回復していった。やがて、修道院は成長と繁栄、そして大きな評判を得ることができ、多くの患者が来るようになり、さらに温水と冷水も出る素晴らしい浴場も建設し、ウィリーは建物の復元という非常に大きな仕事を成し遂げ、彼自身も医師になり父親と共に患者の治療に携わった。

後に、ウィリーの父親とシェパード氏の死後に、モナはウィリーの夢の絵を描いてもらった。それは2人の天使としての肖像画であった（Chapter 24, 520）。肖像画として描かれている2人の天使は、当時のウィリーにすべきことを暗示しただけでなく、これからのウィリーとモナについても遠くから見守ってくれる存在であると解釈できる。何か困難に立ち向かうとき、人々のために役立つことに取り組むとき、ウィリーはこの2人から学んだ教えを守る。その2人の有する力は偉大なもので結びつけられている。ウィリーにとって、2人は死後も彼の中で生き続けるのである。

上記で述べてきたように、天使の挿絵には多くの象徴的要素が含まれており、それらはウィリーの父親の医師としての仕事とシェパード氏が日常で行っている活動と重ね合わせることができる。言葉の薬と飲む薬の双方は神からの受け継いだものであり、それをウィリーも継承する。また死後には天使として肖像画に描かれることで、2人は天上からウィリーに力を与える役割を担っているのである。

おわりに

本稿では、物語の挿絵に焦点をあてどのように描かれているかについて検討した。19世紀では木工木版画の技法が発展し、彫り師の熟練された技術が非常に重要であり、ヒューズの挿絵は非常に正確に再現されていることがわかる。また、ヒューズは物語の内容を忠実に挿絵で表しており、テキストと挿絵の融合性においても非常に優れている。さらに、本稿で注目したのはウィリーの父

親とシェパード氏の2人の天使の挿絵であった。挿絵における描写には、救済や再生の象徴的要素が多く含まれており、病気で苦しんでいる人々を救うための役割をウィリーに託しているように解釈できる。ウィリーの夢は、現在彼がすべきこと、そのことによって未来がどのように導かれるかが暗示されていた。ウィリーの父親とシェパード氏が天使として現れたことによって、彼らは神からの使者としての役割も担っていることが明らかだ。また死後には天使として肖像画に描かれることで、ウィリーは彼らに見守られ困難なことも試行錯誤を重ねながらも成功へと導かれているのである。従って、物語に添えられた挿絵は、視覚的効果を与えるだけでなく、さらに深い解釈を導く役割を担っているのである。

挿絵はすべて、筆者がロンドンの British Library にて撮影したものである。

図版

MacDonald, George ed. *Good Words for the Young*. London: Strahan & Co., 1870-1872.
---, MacDonald, George. *The History of Gutta-Percha Willie*. 1871. (January-September)

【挿絵 1】 p.112

【挿絵 2】 p.153

【挿絵 3】 p.232

【挿絵 4】 p.288

【挿絵 5】 p.321

【挿絵 6】 p.361

【挿絵 7】 p.424

【挿絵 8】 p.464

【挿絵 9】 p.520

注

- 1) 例えば、Maurice McInnis は、*Illustrations of At the Back of the North Wind* の中で、ヒューズの挿絵は、“how powerful a book could be when the text and illustrations were integrated and in concert, a harmony of words and pictures”と述べている

(*Illustrations of At the Back of the North Wind* 381)。

MacDonald, George. *At the Back of the North Wind*. Ed. Roderick McGillis and John Pennington. London: Brandview Editions, 2011.

---Appendix E: *Illustrations of At the Back of the North Wind*

参考文献

MacDonald, George ed. *Good Words for the Young*. London: Strahan & Co., 1870-1872.

---MacDonald, George. *The History of Gutta Percha Willie*. 1871. (January-September)

青木茂監修『カラー版 世界版画史』美術出版社、2001年。

菅円吉『キリスト教概説』日本YMCA同盟出版部、1970年。

グリフィス、アントニー『西洋版画の歴史と技法』越川倫明、佐藤直樹他訳、中央公論美術出版、2013年。

シュトレーター＝ベンダー、ユッタ『天使 浮揚と飛行の共同幻想』高木昌史訳、青土社、1996年。

平田家就『イギリス挿絵史 活版印刷の導入から現在まで』研究社出版、1995年。

フォール、フィリップ『天使とはなにか』片木智年訳、せりか書房、1995年。

フリース、ド・アト『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、大修館書店、1995年。

柳宗玄、中森義宗編『キリスト教美術図典』吉川弘文館、1990年。

The History of Gutta-Percha Willie

9 枚の挿絵



【挿絵 1】



【挿絵 2】



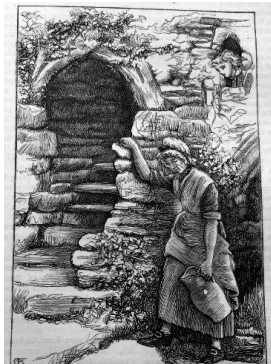
【挿絵 3】



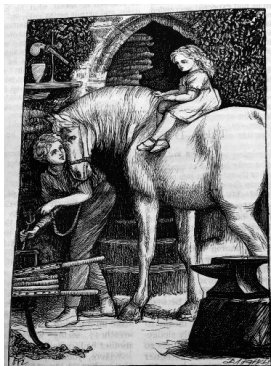
【挿絵 4】



【挿絵 5】



【挿絵 6】



【挿絵 7】



【挿絵 8】



【挿絵 9】